

令和5年度 かほく市立外日角小学校 学校評価計画最終報告書

※肯定的結果が前期より3%以上上がった(太字)下がった(二重線)

重点目標	取組内容	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	肯定的結果	達成度	結果の考察	今後の方針	学校関係者評価
1 確かな学力の育成と授業力向上	① 学習規律、基礎基本の定着・習熟を図る	学習指導部	教師や他の児童の話最後まで聞こうとする姿勢の弱い児童が見られる。	【努力指標】 話す人の方を見て最後まで話を聞いている。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	94% (教)	A	教職員の肯定的評価は高いが、A評価は5%である。	毎月の学習目標に「聞く」について取り上げるなど、全校で聞くことについて取り組むことができた。A評価が5%なので、今後も継続して指導していく。	・聞く姿勢が、児童の興味関心を高め、ひいては学力向上につながると思う。
	② 「ねらいを達成する授業後半の深い学びを充実させる」ため授業力の向上を図る★	学習指導部	他の児童の考えを聞いて自分の考えを再考したり、考えを練り上げたりする力が弱い。自分の考えの変容を感じている児童も多くない。	【努力指標】 深めの発問（切り返しや問い返しの発問）の準備をして実践している。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	95% (教) 90.5% (児)	A	児童「授業が分かりますか」のA評価が、昨年度前期より5%程度下がっている。教職員の肯定的評価は高い。	教師が授業後半の充実を図る意識をもち、ねらいを達成できるように、発問を吟味したり、授業後半の展開に高まりをつけられるよう活動を工夫したりする。授業後半に山場を迎える意識を教師も児童ももてるような授業づくりを目指していく。	・学習意欲が向上するように工夫や手立てが必要なのだが、とても大変なことなので手が足りていない現状なのではないか。先生が一人で背負うことの無いようにしてほしい。
	③ 学習意欲が持続する指導の工夫を図る	学習指導部	「やってみよう」「考えよう」という学習意欲には個人差があり、授業後半まで意欲を持続できない児童もいる。また自分の考えをもつことが難しい児童も各クラスに若干名ずつみられる。	【成果指標】 解決したくなる課題設定の工夫や課題解決を見通すための手立てを行っている。	一日の授業で、 A：3時間以上できている B：2時間以上できている C：1時間以上できている D：ほとんどできていない	73% (教)	C	教職員の肯定的評価は下がっている。	工夫や手立てを行う余裕が教師側になかったように思われる。普段の授業でも学年で工夫や手立てを情報交換をし、お互いに助け合って授業に取り組めるようにする。	・教師は毎日授業ばかりで多忙なので、時に休息も取りながら支えあえる職場であってほしい。
	④ 家庭学習の定着・習慣化を図る	学習指導部	学年に応じた家庭学習の指導の継続により、宿題の提出率はよくなってきている。個別指導が必要な児童は複数いる。	【成果指標】 宿題の提出率が90%以上である。	A：90%以上の児童ができる B：70%以上の児童ができる C：50%以上の児童ができる D：50%未満の児童ができる	95% (教) 74.6% (児) 69.9% (保)	B	児童「自分で計画を立てて勉強しているか」のA評価は5%程度、保護者「子どもは、自分で計画を立てて勉強しているか」の肯定的評価も12%程度上がっている。	自分で家庭学習の取り組み順番を決めるということについては、できるようになってきた。来年度は、始める時間についても、自分で決めて取り組むように児童、保護者、学校共に共通理解して進めていくようにする。	・読書については、学年によって選ぶ本の種類が違うので、どんな本が読みたいかを自分で意識させる場面を設定し、電子図書の利用も考えていけばよい。ゲームやネット使用の時間が増え、保護者自身も本を読まない傾向にあるので、読書好きな子の育成にはなかなか難しい面がある。「本を読みなさい」と言うよりも、本の楽しみを一緒に話せるような場所が図書室であればいいと思う。
	⑤ 学習場面に応じた1人1台端末の有効的な活用に努める	学習指導部	授業のねらいを達成するための、ICT端末・機器の積極的な活用はできてきたので、効果的な活用を推し進めていく。	【努力指標】 クロムブックを使った効果的な活用を行っている。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	85% (教) 93% (児)	B	児童の肯定的評価が90%を超えている。教職員の肯定的評価も20%近く上がっている。	引き続き、積極的にICTに関する研修の参加を奨励し、職員に還元していく。Classroom等で効果的と思われる実践を載せ、いつでも見て参考にできる環境も継続していく。	
	⑥ 学校で読書する習慣を身に付ける	学習指導部	低学年は、図書館に楽しんで通う姿が見られるが、高学年になると進んで読書をする児童が少なくなる傾向がある。	【成果指標】 週に1回図書館を利用する児童が80%以上である。	A：80%以上の児童があてはまる B：70%以上の児童があてはまる C：60%以上の児童があてはまる D：50%以上の児童があてはまる	85% (教) 参考52.2% (児)	B	教職員の肯定的評価は高いが、児童の家庭での読書につながっていない。	毎週金曜日は家庭学習で読書をするのをと学年も徹底する。また目に見えない形で読書をしたという記録を残す(読書日記などを活用する)ようにする。	
2 自己有用感の育成といじめ・不登校・問題行動の未然防止・早期対応	① 気持ちのよい挨拶、時と場に応じた言葉遣いができる	生徒指導部	玄関での朝のあいさつは少しずつ元気になっているが、安全ボランティアや来校者へのあいさつを進んでできる児童が少ない。	【努力指標】 自分から進んであいさつをしている。	A：90%以上いる B：80%以上いる C：70%以上いる D：70%未満いる	86.9% (児)	B	肯定的評価は前期と同様の結果である。	まずは教職員が「いいあいさつ」をすることで、児童のよいモデルとなる。あいさつも含め、教職員からさまざまな学年の児童に声をかけることで、児童とのつながりを少しでも深められるようにする。	・まず大人が声かけや挨拶を笑顔で行うことが大切である。また、時と場に応じた挨拶の指導も行っていく。 ・学校にゲストティーチャーで訪れたときに、高学年女子が爽やかに「こんにちは」と言ってくれてうれしかった。街頭指導時は挨拶が返ってくるが、通学路ではほとんど挨拶が返ってこないのが残念である。
	② 自己肯定感、自己有用感を高める★	生徒指導部	自己肯定感が低く、学校が楽しくない(C,D)と感じている児童が約11%いる。	【満足度指標】 児童が学校が楽しいと感じている。	「学校は楽しいですか(楽しいと言っている)」に対して、AもしくはBと答えた児童・保護者が A：90%以上いる B：85%以上いる C：70%以上いる D：70%未満いる	85.9% (児) 89.5% (保)	B	児童の肯定的評価は前期と同程度である。保護者の肯定的評価は前期と同様だが、A評価は下がっている。	前期同様、特別活動部とも連携しながら様々な場面で、特に高学年においては児童に任せる場面を作りながらその頑張りを認めていく。結果だけでなく過程を見取り温かい声かけをする。児童同士のよりよい人間関係づくりのために構造的エンカウンターなどの取組も行っていくたい。	・子供が抱えている問題は多様だが、問題を見て見ぬふりすることなく、担任1人が抱えるでもなく、学校全体で子供のことを考えて、多くの先生方と相談して一緒に育ていく姿勢を大切にほしい。
	③ 「考え、議論する道徳」を意識した授業改善の工夫	学習指導部	学校行事や体験活動等との関連を図ったり、道徳の教科書をもとに、いしかわ版道徳教材やGTを活用したりして、個々の児童が、思いやりの心を持ち、夢や目標を持ち、共通実践を蓄積する必要がある。また、規範意識の向上にも必要である。	【成果指標】 道徳授業の工夫をする。 ア 導入の工夫 イ 道徳の教科書、いしかわ道徳教材やGTの活用 ウ 中心発問の吟味 エ 道徳掲示の蓄積 オ 体験活動との連動	道徳の授業で A：3項目以上に取り組んだ B：2項目以上に取り組んだ C：1項目以上に取り組んだ D：取り組めなかった	100% (教)	A	教職員の肯定的評価は100%である。	ゲストティーチャーを活用する学年が昨年度より増えた。奇数年が道徳便りを発行し、家庭や地域との連携を図ることができた。どの学年も1度は、参観日に各学級で道徳の授業を公開することができた。引き続き規範意識を向上させるために、生徒指導部とも連携していく。	・道徳だよりや道徳授業の公開があると楽しみである。

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	肯定的結果	達成度	結果の考察	今後の方針	学校関係者評価
2 自己有用感の育成といじめ・不登校・問題行動の未然防止・早期対応	④ 児童の心身状態についての情報収集・共通理解★	生徒指導部	「いじめは絶対にいけない」と思っていない児童が3.6%いる。	【成果指標】 児童が「いじめはどんな理由があってもいけない」と感じている。	「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いませんか」に対して、Aと答えた児童が A：95%以上いる B：90%以上いる C：80%以上いる D：80%未満いる	96.6% (児)	A	児童の肯定的評価は前期より1%程度下がっており、C・D評価も2%程度増えている。	今後も職員が「いじめはどんな理由があっても許されない」という意識で指導にあたる。アンケートで訴えがあった事案やそれ以外にも児童間の気になる関わり方などが見られれば、速やかに組織で対応することを大切にする。	・どんなことがいじめなのか理解できない子がいるのではないかと。いじめられた子の気持ちまで理解が及んでいないのかもしれない。休み時間に、いじめにつながる行動が出やすい。露骨ではなから表には出にくい「いじめ」の見逃しが無いようお願いしたい。学年やクラス間で温度差の無いよう、先生方の共通理解が大切である。また、「そんなつもりがなかった」という加害者側の甘い認識が、いじめの初期対応の遅れにつながることを児童にも保護者にも知ってもらう必要がある。
	⑤ 特別支援教育校内委員会の機能化★	生徒指導部	個別に支援を必要としている児童割合が高い。	【努力指標】 児童理解の会や学年会、終礼等で、児童の実態把握や問題の早期対応に努めている。また、必要に応じて外部機関とも連携している。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	100% (教)	A	教職員の肯定的評価は100%である。	今後も終礼での児童理解の会を継続して行う。ケース会議、保護者面談等の記録を回覧することで共通理解を図り、児童に寄り添った関わり方ができるようにしていく。また、今後も外部機関との連携も積極的にやっていく。	・今回の地震で、少なからずショックを受けている子もいると思う。聞き取りなど丁寧に行い、今後も心のケアをお願いしたい。
	⑥ 児童が主体的に活動できる場を設定すると共に、集団の中で協力する心や他を思いやる心を育てる	特別活動部	なかよしグループ活動には、楽しく参加しているが、協力し合ったり、助け合ったりする関係が十分にできているとは言えない。	【努力指標】 なかよしグループ活動に自分から進んで活動に参加し、楽しむことができる。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	96.2% (児)	100% (教)	A	児童・教職員共に肯定的評価が90%を超えている。	今後も、継続して教師からの認める声かけの場や異学年間のいじめカードを活用した認め合いの場を積極的に設け、協力したり思いやりする価値に気づかせ、意欲の向上を図る。委員会活動でも縦割りでも活動するイベントを企画するなどして、集団で取り組む活動を通して児童全体で学校をよくしようとする意識を高める。
3 児童の体力の向上と健康・安全	① 「体力アップ1校1プラン」をもとに、全校で体力アップを図る「スポチャレいしかわ」の積極的な参加	特別活動部	休憩時間に体を動かしている児童は多いが、運動能力調査の結果に反映されるまでには至っていない。また、運動を好まない児童もいる。	【成果指標】 マラソンやなわとびチャレンジカード等に意欲的に取り組み、体力・運動能力の向上が見られる。	「進んで体を動かしていますか」に対して、AもしくはBと答えた児童が A：90%以上いる B：70%以上いる C：50%以上いる D：50%未満いる	89.9% (児)	A	児童・教職員共に肯定的評価が90%程度を超えている。	3学期になわとびチャレンジ・大縄(8の字)を行う。その際、大縄(8の字)の結果回数を記録し、体育館に掲示していく。同学年や異学年の結果を見ることで、児童が進んで大縄(8の字)に取り組む意欲を高める。	・スポーツの苦手な子には、結果より過程を評価してあげてほしい。 ・下校時に、歩道の縁石を歩いたりブロック塀に登ったりしている児童は確かによく見かける。こちらから注意すればいいの判断に迷うこともある。地震の影響もあるので、ブロック塀に登らないよう学校で注意喚起と指導を行ってほしい。
	② 避難訓練実施を含め、危険予測能力、事故回避能力などを育成する	保健安全指導部	登校時の交差点の渡り方や下校時の道路の歩き方にまだまだ不安がみられる。	【成果指標】 交通ルールを守って道路を歩くことができる。また、非常時において避難の仕方が分かる。	「歩き方や自転車の乗り方に気を付けていますか(交通事故から身を守る習慣が身につけている)」に対して、AもしくはBと答えた児童・保護者が A：90%以上いる B：80%以上いる C：70%以上いる D：70%未満いる	97.3% (児)	A	保護者の肯定的評価は、前期より3%程度上がっている。	A評価であるが、まだまだ交差点の横断で危険な場面を見かける。今後も、定期的に街頭に立って下校指導をしていく。また、地震災害に備えて余震も含めた避難訓練を行う。震度大きい場合も想定して、避難方法を検討・変更していく。	・今回の地震でも感じたが、ヘルメットの着用は大切である。 ・地震や風水害の際の、児童の避難方法の確認と周知をお願いしたい。
4 家庭・地域との連携	① 各種便りやホームページ等での情報発信の充実	情報担当	様子や取組を更新している学年と更新していない学年の差が大きい。	【成果指標】 定期的にホームページを更新する。	A：毎週更新している B：隔週で更新している C：月1回で更新している D：一月以上更新していない	43% (教)	C	教職員の肯定的評価は高くないが、保護者「学校だより」等で教育方針や学校・学級の様子が分かりやすく伝えられている。A評価が6%程度上がっている。	R6よりホームページの形式を変更し、全学年が同じ項目で編集を行うことになった。学年によっての更新頻度の差が顕著にならないよう、定例の学年会でのA評価を6%程度上げていく。	・今回の地震で、市と学校・地域との連携の重要性を実感した。防災訓練を地域で行う必要があるし、学校が避難所になる場合のシュミレーションも市と連携して行っていくことが一層求められる。
	② 保護者への「報・連・相」	管理職	学校生活で気になることや児童同士でのトラブルなどを保護者へ丁寧連絡している。気になることは必ず保護者へ連絡することを継続する。	【努力指標】 児童の気になることに対して保護者への電話、面談、訪問など速やかな対応を行っている。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	100% (教)	A	教職員の肯定的評価は100%である。	児童の気になることや怪我等に対して、保護者への対応は速やかに行っている。保護者からの連絡に対しても、丁寧に対応する心がけている。今後も報連相に留意しながら組織的に対応していく。	・ヤングケアラーや虐待など、気になる児童がいらないか確かめ、必要ならば外部機関への相談を行っていく。
5 教職員の働き方改革と人材育成	① 教職員が担うべき業務に専念できる環境を確保 教材研究や学年会の時間を確保	管理職	超過勤務はやむをえないという意識から、ワークライフバランスや適正な勤務時間のさらなる意識向上が必要である。	【努力指標】 週2回以上19時30分までに退校している。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	85% (教)	B	肯定的評価は前期より5%上がっている。	前期に比べて、確実に退勤時刻が早くなっている職員が増えた。学年内で教材研究や仕事分担を行っている成果が出てきたものと思われる。来年度に向けて、仕事分担を見直すとともに、仕事の細分化と担当の明確化を行っていく。	・教職員の勤務時間は長すぎると感じている。AIを活用できることはないのか探してほしい。教員になりたいという人が多くなるよう願っている。
	② 研修の充実★ 若手主体で取り組む若プロ	教務部	担当としての研修会や都市教育課程研修会の参加のみになっている教職員が少なくない。	【努力指標】 主体的に研修会に参加したり、月に1度は他の教師の授業を参観し意見交流をしたりする。	A：よくできた B：おおむねできた C：どちらかといえばできない D：できない	100% (教)	A	教職員の肯定的評価は100%である。	教師の日常的な相互授業参観が定着し、週案や学年会シートを活用した交流も各々の授業改善の手立てとなっている。若プロ研修に関しては、若手主体の取組となるよう推進していくことにする。	・学校コーディネーターと連携した活動は大変効果的だと感じる。児童にとっても、外部との触れ合いによる学びが大きいと思う。今後も続けていってほしい。
ラ6 ムンカトネリジキメ	① 学校CNと連携し、教科や活動のねらいに沿った外部人材の活用を進めることで、効果的に学習を行う	教務部	学校CNと連携し外部人材の活用し効果的に学習を行ことを継続していく。	【努力指標】 学校CNと連携し、教科や活動のねらいに沿った外部人材の活用を進める	A：よくできた B：おおむねできた C：どちらかといえばできない D：できない	94% (教)	A	肯定的評価は90%以上と高い。	学校CNが、学年からの計画に沿って連絡・調整し、外部人材を効果的に活用できていることで、児童にとって有意義な学習となっている。	